

葬送
儀礼

の現状を考える ③

「葬儀」問題の多様化

浄土真宗本願寺派 総合研究所
葬儀研究プロジェクト

■「死」の多様化

「葬儀」という言葉を聞いて、何をイメージされるでしょうか。自分らしさ、家族・親族、お墓、遺骨、弔い、地域性、伝統、お金など、人によって異なると思います。現在、「葬儀」の問題が多様化しているのは、こうした「異なり」と密接に関係していると考えられます。

そこで今回は、「葬儀」が抱えている多様な問題を一部ではありますが報告することで、皆様とともに「葬儀」を考える一助にしたいと思います。

現代社会では「死が見えない」と指摘されることがありますが、その反面、「死」を取り巻く環境は多様化を続けています。例えば、自死（自殺）の問題が挙げられます。報道によれば、年間三万人をこえていた自殺者数が、二〇一二年以降は三万人を下回っていると発表されています。しかし、全体的な減少の中で、若年層の自殺者は高い水準で維持されて

いるという指摘もあります。

また、高齢化社会ではなく超高齢社会とも表現されるようになった現在、孤独死・孤立死の問題は、NHKのドキュメンタリー「無縁社会」で報道され、人びとに衝撃を与えました。その他、尊厳死・安楽死といった問題も挙げられます。これらは、単に高齢者の方だけの問題でなく、どのような年代の方にも関係する社会的な問題と理解しなければなりません。

こうした「死」の多様化は、そのまま私たちが生きる「現代社会」がどのような社会であるかを表していると言えます。その際、忘れてはならないことは、急激な科学技術、医療技術の発展です。「脳死」は、「臓器移植」と結びつけ議論される中で、私たちに大きな問題をつけました。二〇一〇年七月十七日に全面施行された改正臓器移植法によって十五歳未満の子どもからも臓器移植が可能となりました。昨年十一月には、「脳死」と判定された六歳未満の子どもから臓器

移植が行われたという報道がありました。その報道や、臓器提供を決断された

ご両親のコメントを見て、「脳死」とは、「死」とは、「いのち」とは、と考えた方もいらつしゃったのではないかと思えます。

先に「死が見えない」と表現しましたが、もしかしたら「見ていない」「見ないようにしている」のかもしれない。誰にでも起こりうることとしての「死」を見つめることが必要とされているのではないのでしょうか。

■「生活環境」の多様化

「地方創成」という言葉を耳にすることが多くなりました。少子高齢化、過疎化を含んだ「地域・地方」の問題は今後その緊迫度を増していくと思われま

す。この問題も多様な側面を持っています。例えば、定年後の海外移住、結婚後の海外移住・海外転勤などは、TV番組などで多く報道されています。現代人の

生活を考える際に、「グローバル」な視点は不可欠な要素となっています。

また、文部科学省が発表した進学率（高専・専門学校も含む）約八十%という数字は、進学を機に生まれた土地を離れる若者が少なくないことを意味しています。

「葬儀」との関連を考えますと、地域性や伝統の継承が難しくなるといふ点が指摘できます。進学を機に生まれた土地を離れた子どもに、土地に根付いた伝統を伝えることの難しさを経験された方には多いのではないのでしょうか。また、葬儀に際し帰省したとしても、長時間の滞在が不可能なために、葬儀社にすべて任せ、僧侶と十分な話をする機会が持てなかつたという方もいらつしゃると思います。

「生活環境」の多様化は、これまで普通にできていたことを「物理的に不可能な状況」に追いやり、しかも、一人の思っただけでは「どうすることもできない状況」を作り上げています。だからこそ、逆に「葬儀」が社会問題として取り上げ

られているのだとも考えられます。

■葬儀産業の多様化

こうした社会の現状に即した形で、または現状を投影した形で、「新たな葬儀」が提唱されているといつていいでしょう。ここに産業の一つとして葬儀が捉えられた一因があります。時間的余裕がない方には一日葬を、費用をかけたくないならば直葬を、地域や親族のつながりが煩わしいならば家族葬を、といった具合に、さまざまな要望や現状にあわせる形で葬儀が提供されています。

葬儀産業の多様化は、現代の人びとが何を求め、葬儀をどのように捉えているかを映し出す鏡だと考えることができます。そこで、「さまざまな要望や現状にに応じていく」という点に注目してみたいと思います。

■「視点」の多様性

「さまざまな要望や現状に応じていく」ということは、葬儀に関わる人びとの「視点」がさまざまに存在しているということを意味します。

「終活」という言葉に代表されるように自分の葬儀を考える方、いわば「故人」の視点を中心にして考えてみます。例えば、故人が生前、家族葬を希望し、実際に家族葬のみで葬儀をしたとしましょう。すると、遺族として参列できなかった親族、生前故人と深い関係にあった友人や地域の方々には葬儀に出席できなくなります。遺族は、故人の思いに「こたえ」家族葬を行ったのであり、葬儀に出席できない方がいらつしやることは、非難されるものではありません。しかし、葬儀に出席できなかった故人とつながりのある方たちにどのように対応していくのか。更に言えば、故人の思いをどのように伝え、その上で新たなつながりをどのように作る

っていくのかという問題は避けることができません。

葬儀には、「故人が中心である」という側面があることは否定できません。しかしながら、遺族の方以外にも、「かけがえのない方」を亡くした悲しみを持たれている方がいらつしやいます。葬儀には、そうしたさまざまな方の「視点」が複雑に絡み合っているのです。

この「視点」に注目した場合、重要な点として「時間的な幅」を指摘します。これは、葬儀そのものに費やす時間というだけでなく、葬儀を中心にして、その前後で「こうしたい」「こうしたほうがいい」「こうすればよかった」などというさまざまな「視点」が「時間的な幅」を持って混在しているということです。

この点について、TV番組などでも活躍され、二年前に死去された流通ジャーナリスト・金子哲雄さんの行動から考えたいと思います。

金子さんは、自宅死を希望され、通夜、葬儀だけでなく会葬礼状やお墓まで、一

人で準備されたそうです。想像でしかありませんが、迫り来る死の恐怖と戦いながら、残される奥様をはじめとする方々のことを思いながら、葬儀の準備をされたのだと思います。ですから、「葬儀」には金子さんのさまざまな「視点」（思い）が込められています。これを残された側から理解するとどうなるでしょうか。金子さんの思いを受け取りながらも、親しい人ならば「どうして教えてくれなかったのか」、「あの時もつとこうしておけば」などの思いがわきおこることも否定できないように思います。

葬儀の研究を長年行われている国立民族博物館の山田慎也氏は、「プロセスとしての葬儀」という言葉を使われています。これは、本来、葬儀とは臨終、葬場、還骨、そして中陰、回忌法要も加えれば、長い時間をかけて「死」と向き合ってきたという伝統を表現されたものです。

「死」の悲しみ、苦しみは、亡くなっていく側にとっても、残される側にとつ

ても、一時的なものにとどまるものではないありません。こうした「時間」の問題を考えることも今後必要になってくるでしょう。また、金子さんは、生前僧侶と多くの話し合いを持たれたそうです。ここに葬儀を中心にした関わり合いに対する一つのヒントがあるように思います。

■「これからの葬儀」

「葬儀」が抱える問題の多様性として、死生観、環境などを指摘しました。こうした現状を受け、葬儀や宗教の役割を再認識していこうという傾向が見られます。私たちが気をつけなければいけないことを考えてみたいと思います。

まず、「従来の葬儀」を行うことが可能な状況が見られるということが指摘できます。有縁うゑんの方々すべてが集まることの困難さを感じている方は多いことでしょう。僧侶は、「従来の葬儀」が維持しにくくなった今、「これからの」方法を模索もさくしていかなければならないという厳し

い立場に立たされています。しかも、どの寺院や僧侶にも当てはまるような普遍的な方法は見出しにくいと言えます。なぜなら、寺院の活動や、僧侶と門信徒との関係は、地域ごと、寺院ごと、人ごとに異なるものだからです。葬儀に関する著書も多い新谷尚紀氏は、『「お葬式」の日本史』（青春出版社、二〇〇三年七月）の中で、

変化と混迷の時代には何よりも過去の慣習を知ることが肝要かんようである。そして、何が大切なものとして守り伝えられてきたのか、何が維持できなくなってきたのか、それを知らないとそこが、現在と未来の展望への指針となるにちがいない。と述べられています。

■小 結

一九六〇年代頃から社会で葬儀不要論が主張され始め、二〇〇〇年中頃よりその主張は急速に高まりを見せています。

しかし、このような状況でも葬儀を大事にしたいと思う人びとの声はけつして少なくありません。

私たちは、葬儀の何が批判されているのか、先人が葬儀を大切に執り行ってきたのはなぜか、子や孫に葬儀を通して何を伝えていこうとしているのか、などを、一度立ち止まって考えなければならぬ時期に来ています。

その上で、見直し改める点については真摯しんしに対応すべきです。前回の報告で「素行の悪い僧侶の振る舞いや言動を問題視する声も少なからずあります」と指摘させていただきました。素行だけでなく、葬儀の執行をまかされているものとして、どのような行動や言動が求められているかも考え直す必要があると思います。

また、これまでとは異なった「伝え方」を模索し続けることも必要です。ご門主は「法統継承に際しての消息しゅうそく」の中で、ご法義はいつの時代、社会でも変わらないうが、その伝え方は変わっていかなければ

ばならないとお示しくございました。

「葬儀」とは、かけがえのない「誰か」の最後の儀礼であり、同時にその「誰か」と関係の深い方が「死」を受け入れ、これから生きていく第一歩となるものです。だからこそ、社会状況や人それぞれの立場に左右されながら、それぞれの思いが長い時間の中で交錯こさくしてしまうのです。僧侶はこの点を認識し、継続的な関わりを持たなければなりません。確かにこれは現代において難しい状況ではあります。ですが、そうした努力の結果として、徐々に形成されていくものこそが「これからの葬儀」ではないでしょうか。

(総合研究所 岡崎秀麿)